

ふるさと再発見

～幕末維新と徳地～

鹿野から串、山畑大野へ ～新山代街道～

「静かな山里が突然！」今回はそんな話を書きます。

文久3年（1863年）5月、長州藩は下関で外国船を砲撃しました。攘夷（外国を討つ）の決行です。これに備えて、藩は情報^{じょうほう}の収集と命令を素早くするため、交通不便な北浦の萩から山口へ藩府を動かしました。現在の県庁はこの時に移ったものです。当然、この動きで藩内の交通網も大きく変化しました。一番変わったのが「山代街道」です。

山代街道は長州藩の山間部（山代・奥山代・徳地・奥阿武の各^{さいはん}宰判）をつなぎ、「萩往還」や「赤間関街道」と同様に大変重要な街道でした。ところが幕末、藩政の中心が萩から山口へ移ったことで、役人の動きや公用書類、年貢、志士たちの動きが大きく変わっていきます。山代宰判^{はんこう}の本郷から鹿野までの道は同じですが、



串 安養地付近の新山代街道

鹿野から徳地柚木、阿東生雲→萩への本道（本来の道）が、鹿野から仁保津、串、木引谷、大野、中・下畑、堀、漆尾峠、引谷→山口と大きく迂回したのです。特に慶応2年（1866年）6月に起こった四境戦争（第二次長州征伐）では、約15万人もの幕府軍が長州を取り囲み、各地で激しい戦闘となりました。このため、この新山代街道を使って兵員^{ひやうりゆう}や兵糧、武器などを移送したものと考えられます。きっと静かな山里に激震が走ったことでしょう。

文久3年9月から翌年の元治元年8月までの1年間の仁保津・串・山畑・堀の4村の通行量は人夫1942人、馬215匹と、平常の100倍以上となった記録が残っています。（なお、江戸時代の4村合計の年間人夫数は15人、馬数は18匹と決まっていた。）

新山代街道が鹿野から串を通り、山畑、堀、引谷へと走ったことで、新しい時代の風（倒幕の動きや草莽^{そうもう}崛起^{くつき}の考え方）が徳地の人々、とりわけ徳地の若者に大きな影響を与えたであろうと想像されます。



山口藩庁 大手門